

【防波堤から見た築港の歴史の連続性】

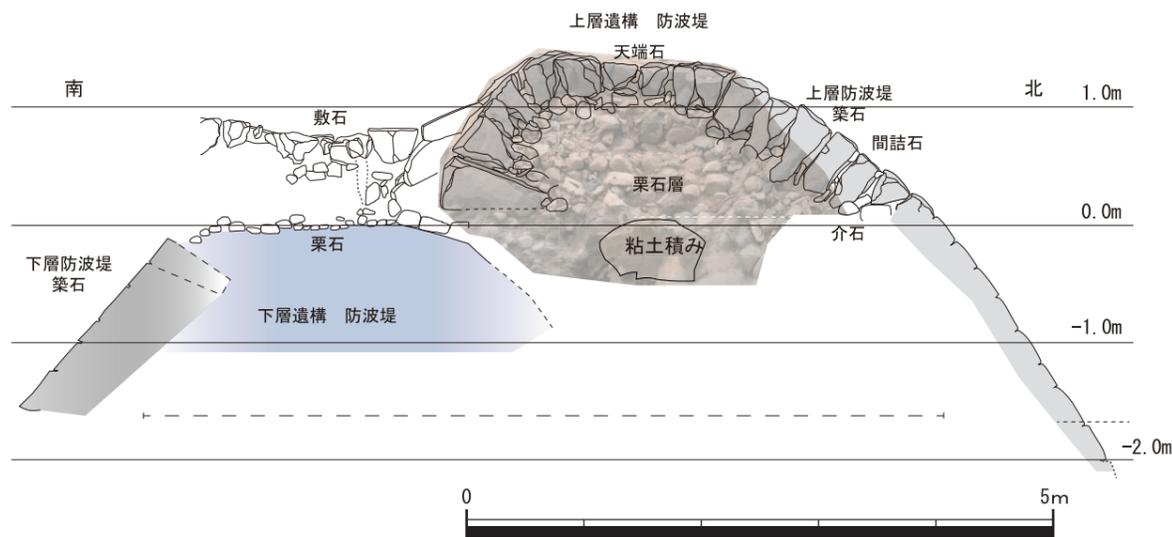
発掘調査の最大の成果は神戸海軍操練所と神戸港第一波止場の遺構が重なり合って検出されたことです。なかでも、北側の防波堤と灯標基礎の周辺では幕末期に築造された防波堤を利用して、その上に明治時代の防波堤を築き、港の機能を拡充した様子が明らかになりました。



北側防波堤 北面立面



幕末期から近代神戸港への発展を示す石積みの重なり（灯標基礎南側から）



上層・下層防波堤 断面模式図

【まとめ】

発掘調査によって以下のような重要な成果をあげることができました。

- ①近代神戸港の様子を伝える古写真、古地図と一致する地点が明らかになった。
- ②幕末期から近代にかけての港湾施設の築港に伴う土木技術や構造を明らかにできた。
- ③幕末期の神戸海軍操練所から明治時代の神戸港第一波止場にかけての遺構が連続性を持って重なり、古い構造物を活用しながら神戸港が発展してきた痕跡を確認できた。

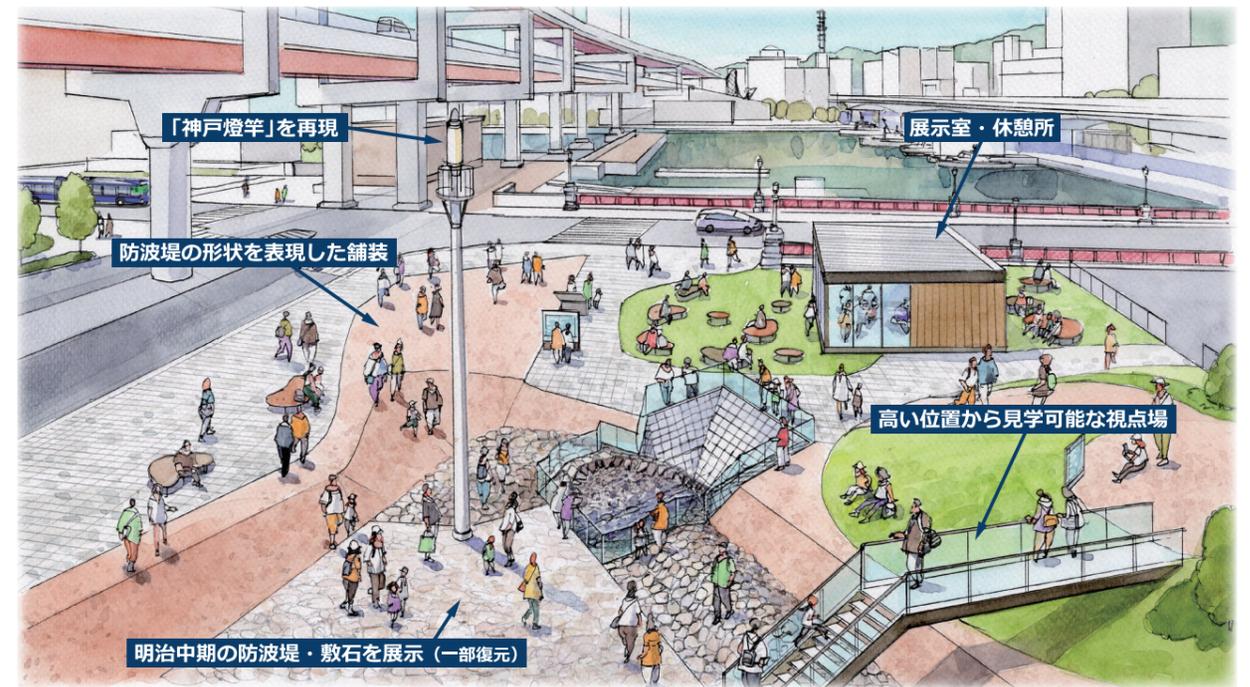
●海軍操練所跡についてより詳しく知りたい方は文化財課HP ⇒
もしくは「神戸市 海軍操練所跡」でお調べください。

発掘調査報告書PDF 公開中！



神戸は海と山に囲まれた美しいみなとまちです。開港以来、海外との交流を重ね文化や交流を日本に生み出してきました。コンテナ船の時代になって港の機能がポートアイランドや六甲アイランドなどの沖合に移っていく中、かつての港湾物流を支えた新港突堤西地区などの旧臨海部では、ウォーターフロントの再開発によって、見違えるような姿に変わりつつあります。本日ご覧いただく海軍操練所跡の遺構は、変化を続けるウォーターフロントにあって、神戸港のはじまりであり、発展の原点となる遺跡です。今昔の歴史が交錯する神戸のウォーターフロントをぜひお楽しみください。神戸開港160年となる2027年春の展示施設オープンもどうぞお楽しみに！

【2027年春オープンの展示施設完成イメージ】



【神戸港の歴史・変遷】

1864年 海軍操練所設立			
1868年 神戸開港 メリケン波止場築造			1963年 神戸ポートタワー開業
1907年 新港第1～4突堤着工 (1922年全工事竣工)			1966年 ポートアイランド(第1期)着工 (1981年竣工)
1923年			1967年 コンテナ船初入港
1929年 中突堤着工 (1938年竣工)			1972年 六甲アイランド着工 (1992年竣工)
1940年			1981年 「ポートピア'81」開催
			1984年
			1987年 メリケンパークオープン
			1992年 神戸ハーバーランドオープン
			1995年 阪神・淡路大震災
			1998年 中突堤中央ターミナル 「かもめりあ」供用開始
			2006年 神戸空港開港

海軍操練所跡について

●遺跡の概要

海軍操練所跡は旧生田川から流れ出た土砂の堆積によって形成された砂嘴(さし)上に位置する遺跡です。この場所には1855(安政2)年に二ツ茶屋村の呉服商、網屋吉兵衛が私財を投じて建設した船たて場がありました。船たて場は船の整備や修理を行う場所で現在のドライドックの前身となる施設です。船たて場はその後、1863(文久3)年に設置された神戸海軍操練所、1867(慶応3)年12月7日(1868年1月1日)に開港した神戸港第一波止場へと役割を変え、今の神戸港の発展に続きます。

2004年に「海軍操練所跡」の遺跡名で神戸の発展に寄与した重要な近代遺跡として埋蔵文化財包蔵地に周知されました。

2023年度に神戸市が実施した第1次調査によって神戸港第一波止場の遺構を初めて確認し、その下層から神戸海軍操練所のものと考えられる遺構を確認しました。幕末期から明治時代初頭に開港した五都市(神戸・函館・横浜・新潟・長崎)において、築港に伴う遺構が重層的に検出できたのは初めてです。

海軍操練所跡はみなとまち神戸の発展の原点となる場所であり、神戸市だけではなく日本の幕末、明治時代の政治史、開港史において重要な遺跡です。

●発掘調査の成果

発掘調査で検出した遺構は大きく上層遺構と下層遺構に分けられます。

上層遺構は、北側、南側の2本の防波堤とその間に敷かれた敷石、灯台の痕跡(灯標基礎)です。これらの遺構は明治時代中期に神戸港第一波止場が改修された際のものを中心となっていると考えられます。

灯台は『神戸燈竿(とうかん)』と呼ばれ、1877(明治10)年に点灯を開始、1888(明治21)年頃に改修、1904(明治37)年に新港突堤の整備に伴い廃灯となったものと考えられます。神戸市立博物館が所蔵する明治時代中期の古写真に灯台の様子が写っており、『神戸燈竿』の改修後の姿を示すものと想定しています。

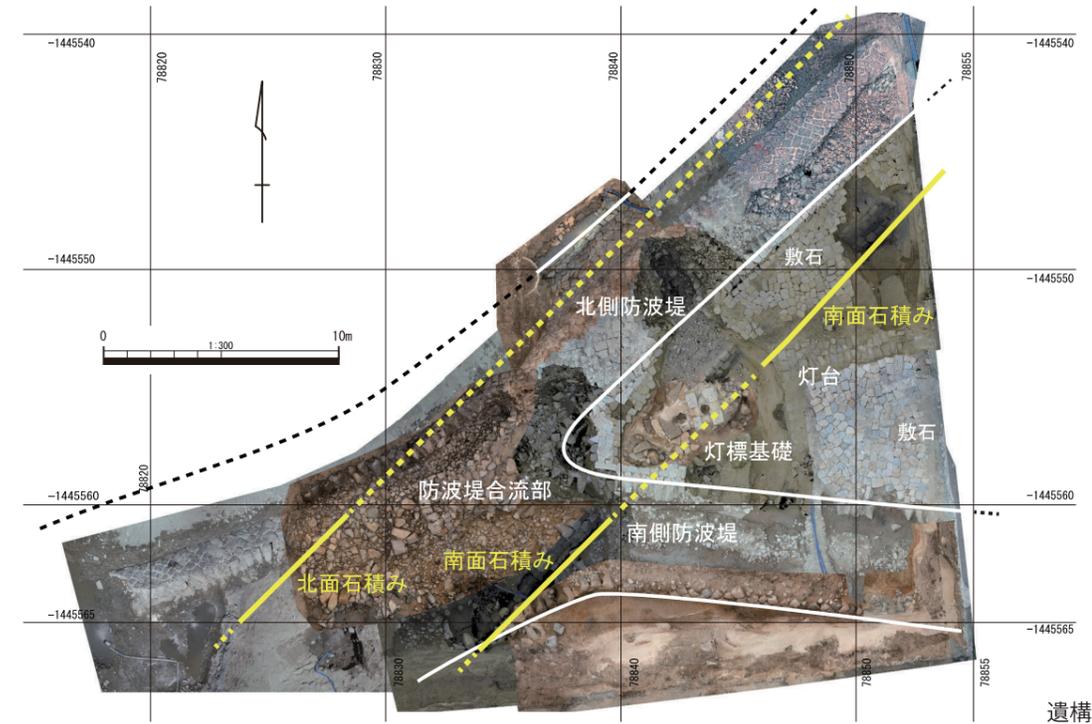
上層遺構の下からは、波止場の建設工事時に工事関係者に食事を提供するために使用した、調理施設と考えられる炭が堆積したカマド遺構が見つかりました。また、南側防波堤沿いで波止場の建設工事時の搬入口に関係する遺構を検出しました。

下層遺構は、北東から南西方向に伸びる大規模な防波堤です。この防波堤は、勝海舟の建言により幕府が建設を進めた神戸海軍操練所に伴う遺構と想定されます。おもに花崗岩製の間知石を用いていますが、上層の防波堤が谷積み構造であるのに対し、下層の防波堤は布積み構造です。なお、神戸海軍操練所は海軍士官の養成所、海軍工廠(かいぐんこうしょう・現在の軍需工場)の施設であり、稼働した期間は1864(元治元)年から翌1865(元治2)年のわずかな期間でした。



「明治時代中期の第一波止場防波堤の様子」
『瀬戸内海写真帳』 神戸市立博物館蔵

調査地周辺の出来事(略歴)と調査での検出遺構		
年代	出来事	
1854(嘉永7)年 ～1855(安政2)年	網屋吉兵衛により船たて場築造	
1864(元治元)年5月	海軍操練所開所	下層遺構
1865(元治2)年3月	海軍操練所閉所	
1867(慶応3)年12月	神戸港開港(1868年1月1日)	発掘調査で 検出
1871(明治4)年	第一波止場工事開始か	
1877(明治10)年	神戸燈竿点灯	
1889(明治21)年	第一波止場 神戸燈竿改修工事か(明治31年の可能性あり)	上層遺構
1904(明治37)年	神戸燈竿廃灯 第1～4突堤造成開始 1922(大正11)年完成	
1964(昭和39)年	船溜まり部埋め立て 1966(昭和41)年には埋め立て終了	



遺構面平面図

【上層遺構】

南北の防波堤は東からそれぞれ直線的に造られ、灯台付近で合流して南西方向に続いています。防波堤は大小の間知石を用いて谷積みで積み上げられています。その内部には栗石や粘土塊などが埋められています。敷石も間知石を用いており、現場で加工しながら丁寧に敷かれています。灯標基礎は古写真と符合するように南北の防波堤の合流部近くで検出されました。発掘調査によって灯標基礎の新旧の改修痕跡、避雷設備に伴う銅板、柵で囲まれた灯台の敷地内の敷石の存在が明らかになりました。

カマド遺構からイギリス製銅版転写皿やフランス製のインク瓶など、海外や居留地との関係を彷彿させる遺物が出土しました。



灯標基礎の改修の痕跡



敷石石組みの様子



カマド遺構出土遺物

【下層遺構】

防波堤は調査区の北東部から南西部にかけて、長さ約27mを検出しました。黒雲母花崗岩、花崗閃緑岩を用いた布積み切込み接ぎという、石の横目地を水平に通して積み上げたものです。石積みの上部が失われており、本来の高さは不明ですが、基底石を確認した箇所での石積みの高さは約1.6mを測ります。基底石の下部では胴木などは確認していません。防波堤全体が砂嘴の地形変化に合わせて石の高さと段数を調整しながら構築されています。防波堤の幅は約7.5m以上であることが判明しました。



調査区北東部 防波堤南面



同左 布積み近景



調査区南西部 防波堤北面